学校現場の実践から 教育旅行レポート

教育旅行は、思い出づくりにとどまらず、生徒の成長を促す重要な学びの機会だ。自ら考え、仲間と協力して行動する中で、主体性や判断力が育まれる。こうした力をどう引き出すか。2校の実践事例から考える。

県立平塚工科高等学校（神奈川県平塚市）

漁村・農村の営みと向き合う

九州方面（長崎・福岡）

民泊体験や方言交流も

酒井崇教諭

水田智大教諭

神奈川県の湘南エリア、海と川、山に囲まれた自然豊かな地にある県立平塚工科高等学校（塩浦健吾校長、平塚市）。2003年に平塚工業高校と平塚西工業技術高校の再編統合により設置された全日制高校で、前身の工業高校を含めると87年の歴史を持つ。総合技術科を置き、科学技術の発展を担う人材育成に取り組んでいる。

一般的な工業高校では入学前に専門分野を選択するが、同校では1年次に工業の基礎を学び、2年次から「系」と呼ばれる専門科目を選択する仕組みを採用。基礎的な学びを踏まえた上で、自身の興味や適性に応じた分野を選択できるのが特徴だ。

専門科目は県内で唯一、自動車の整備や電気装置を学べる「自動車系」をはじめ、「機械系」「電気系」「環境化学系」「総合技術系」の計5分野を設置。3年次からはさらに七つのコースに分かれて専門性を深める。就職希望者の内定率は100%と高い実績を誇り、2年次に上級学校を訪問するなど、専門学校や4年制大学への進学を目指す生徒の指導にも力を入れる。

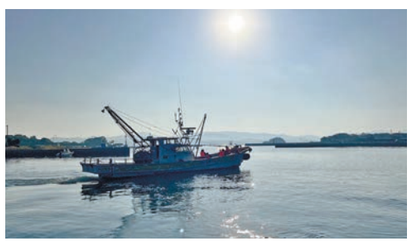
こうした専門分野中心の学習に日々打ち込み、進路先も地元志向が強い生徒が多いことから、2年次の修学旅行では「普段とは異なる環境に身を置き、地域の人々との交流を通じた体験」を重視。2年前に実施し生徒から好評だった長崎県松浦市での漁村・農村体験と民泊体験を中心に構成し、市内や福岡への訪問も組み込んだ。

修学旅行は11月13日から16日の3泊4日で実施し、2学年135人（7クラス）が参加。学期末試験を控えていたことや感染症の流行状況も考慮し、事後の特別な学習は設けず、現地での体験を通じて学ぶことを重視した。

修学旅行の目玉は、長崎県北部に位置する松浦エリアでの体験プログラム「松浦党の里ほんなもん体験」だ。一行は2日目の14日に松浦に入り、事前にクラスごとに選択した福島、今福、青島、生月、田代の5地区に分かれ、2日間にかけて体験活動を行った。

松浦は伊万里湾に面し、日本一のアジの水揚げ量を誇る漁業の盛んな地域であることから、田代地区を除く4地区では地元漁師とともに船に乗り込み、船釣りや港釣りを体験した。生徒たちは地元漁師の指導を受けながら、自らさおを握って魚を釣り上げ、釣れた魚は自分で針を外す体験にも挑戦した。普段漁師が使うポイントに案内してもらい、魚との駆け引きを楽しんだ。現役の漁師との貴重な体験で、地域の生業への理解も深まったようだ。

田代地区での農業体験では、ジャガイモの袋詰め作業を体験した。地域の人々から作業の手順や栽培の工夫を教わりながら作業に取り組み、農業の大変さや食の大切さを実感した。



普段とは異なる環境に身を置き、地域の人々の生業にも触れた

えむかえ繭玉作りに挑戦（写真提供：まつうら党交流公社、写真の人物は同校と関係ありません）

松浦市に隣接する佐世保市江迎町で古くから伝わる縁起物「えむかえ繭玉」作りも行った。ちりめん生地を球状の発泡スチロールに埋め込みながら模様を作るもので、発泡スチロールに刻まれた溝に布を押し込んでいく。工科高校ならではの手先の器用さを発揮する生徒も多く、「実習で身に付けた丁寧な作業や手先の感覚が体験でも生きていた」と水田智大教諭。

14日の体験学習後は、松浦の受け入れ家庭で民泊体験を行った。一つの家庭に最大5人の生徒が滞在し、郷土料理づくりや食事、日常生活をともにしながら交流を深めた。体験で釣った魚が振る舞われたり、日本の棚田百選に選ばれた「土谷棚田」まで車でドライブし、満天の星を一緒に眺めたりするなど、民泊ならではの温かいもてなしに触れた。

また、生徒の関心を大きく集めたのが県北部特有の方言だ。「～ばい」「～たい」といった語尾が特徴で、言葉の意味を尋ねるなど、地域の文化に興味を示す生徒の姿も見られた。

このほか、体験プログラム前の1～2日目には平和公園と原爆資料館を訪問したほか、班ごとに市内を巡る自主研修の時間も設けた。3日目の午後からは福岡に移動し、太宰府天満宮の参拝、市内での自主研修も行った。

修学旅行を終え、川戸梨紗子教諭は「普段自分からの発言が控えめな生徒でも、修学旅行での出来事を積極的に語る姿が印象的だった」「いつかこういった場所で暮らしてみたい」と、漁村・農村での暮らしに興味を示す声もあったという。

今後は、交通費や宿泊費の値上がりと修学旅行費の上限との板挟みなど、公立高校ならではの制約がある中で、どこまで生徒にとって意義のある修学旅行を実現できるかが課題となっているという。酒井崇教諭は「課題は多いが、修学旅行を通じて、生徒たちに少しでも前向きな変化が生まれてくれればうれしい」と期待を示した。

追手門学院中・高等学校（大阪府茨木市）

自然、文化、生活環境など

スリランカ

五感で本物に触れて知る

辻本義広教頭

学校間交流では民族衣装をまとった生徒たちから歓迎を受けた

「独立自彊」「社会有為」を校是に、幼稚園から大学院までの総合学園を形成する追手門学院（大阪府茨木市）。2019年、追手門学院大学の総持寺キャンパス開設と同時に、追手門学院中・高等学校（木内淳詞学校長）も新たな校舎での学びをスタートさせた。同校は移転を前に、目指す教育の方向性や用意すべき学びの機会などを抜本的に検討。従来の進学実績偏重の教育から脱却し、子どもたちが安心して学べる、楽しんで学べる、自ら学べる学校の実現に取り組んでいる。

生徒たちが自らと向き合い、どのような形で社会とつながっていくのかを考えるために、同校ではさまざまな体験を通して五感で感じたり学んだりすることを重視。特に「本物」に触れることに重きを置いている。「例えば学校で大人に接するといっても、教員という閉鎖的な社会の大人でしかない。学校という閉じた環境ではなく、自然や文化、社会問題などあらゆる本物に接して、五感で知る。そうすることで視座を高め、価値観を広げるきっかけをつくりたいと考えている」と話すのは、学習統括委員長も務める辻本義広教頭だ。

同校が実施するスリランカへの体験旅行も、「本物を五感で感じて知る」ことが一つの大きなテーマ。従来型の北海道への修学旅行や旅行先での社会課題解決に全力を傾ける探究型の旅行を経て、24年から新たに始めた。「体験旅行の行き先は、学校の広報面でもインパクトが強い部分。本校のミッションとビジョンに合わせて、本物体験や『共創と対話』などの要素を持ちつつ、目新しさのある『おもろい』旅行先を求めていたところ、旅行会社からスリランカに下見に行ってみないかとの提案を受けた」と辻本教頭は振り返る。

スリランカは、アジア諸国でよく見られるような近代都市がある一方で、車で30分程度走れば、トゥクトゥクや満車の路線バスなど〝THEアジア〟な情景、さらに車で4時間程度移動し郊外へ行くと、ゾウや水牛が道を横断するようなエリアにも行ける。また世界遺産もある。第2次世界大戦後に当時の大統領が対日賠償請求権の放棄演説をしたことなど、親日感情も強い。さまざまな「本物」に触れられるのはもちろん、費用面や他校が行っていないことなどから、スリランカを行き先の一つに選んだ。

同校では1学年約500人のうち、スポーツコース、創造コース以外の特選SSクラス、I類、II類に所属する400人超が高校2年生で体験旅行を行う。昨年はスリランカと韓国・対馬方面に分かれて実施し、約300人がスリランカで体験旅行を行った。スリランカコースは、5泊6日の旅程を昨年9月16～21日他、3班3日程で実施。1日目はスリランカまで移動、2日目は日本大使館訪問とコロンボ市内観光、3日目は現地の学校との学校間交流、4日目は世界遺産・シギリヤロックの見学の後、ビレッジサファリでの農村体験とジープサファリ体験、5日目は世界遺産・ダンブッラ石窟寺院の見学と買い物、帰国便への搭乗という旅程だ。

漢字や音楽、おもちゃを用いて互いの文化を伝え合った

農村体験でも昼食は多彩なカレー料理を体験

このうち学校間交流では、高等学校や日本語学校を訪問。スリランカの民族舞踊で歓迎を受けたり、カレーランチを一緒にとったりした。日本からも人気のスナック菓子を持っていきアイスブレイクに使ったほか、折り紙や箸などを持ち込んで体験してもらった。

主に片言の英語でのコミュニケーションとなったが、現地の生徒の日本への羨望や関心の高さなどが追交流する姿が見られたという。「生徒の感想でも学校間交流の満足度が非常に高かった。積極性、協働性の部分で予想以上に成果があった」と辻本教頭。日本の生活や環境が当たり前でないことを知れたことも成果の一つとして挙げた。

また全旅程を共にした現地バスガイドの人間的な温かさも生徒たちの心に響くものがあったようで、一緒に写真を撮る生徒や別れ際に涙を流す生徒もいたと辻本教頭は振り返った。

旅行後には、グループ単位で体験旅行新聞を制作し、まとめとした。毎食出てくるカレーのバリエーションの豊富さや現地の文化に合わせカレーを右手で食べた体験、数百頭のゾウが集まる「エレファント・ギャザリング」などを目の当たりにしての感想など、記事の内容はさまざま。五感で本物を知っての衝撃や、体験を起点に調べた内容などが詰まったものとなった。

ジープ・サファリで野生のゾウを目の当たりにした

アンケートによるとスリランカコースの生徒たちの満足度は非常に高く、先輩から話を聞いた後輩たちもスリランカコースを希望する生徒が多いそうだ。

理想の修学旅行について辻本教諭は「単純な経験学習ではなく、体験を受けてのリフレクションがある、対話と共創が兼ねられているもの」と話し、スリランカ体験旅行もかなり理想的な旅行だったと評価した。その上で、生徒たちが行き先決定から全てにオーナーシップを持って決める旅行も取り組んでみたいものの、教員側が求める教育効果などが盛り込まれづらいことなどを課題に挙げた。

同校では来年度以降もスリランカコースを設定する予定。さらにアイスランドコースも追加する方針という。追手門流の本物を五感で知り、学ぶ旅行は、これからも進化し続ける。

生きる力につながる教育旅行は佐賀県

資料もたっぷり

農村・漁村地域でのふれあい民泊体験　唐津市内及び玄海町

● 最大受入 300名程度（300名以上も相談可能）
民泊（宿泊）　体験（日帰り）　民泊＆体験　から選べます。
● 豊かな自然の中、ゆったりと各家庭での交流を楽しめます。
● 安心安全への取り組みを強化し、サポート体制も充実！

アクセス
入村・退村式が「唐津市文化体育館」の場合
福岡空港または博多駅から約 70分（バス）
長崎市から約 1 時間40分（バス）
最寄り駅（唐津駅）から約 10 分（バス）

問合せ先
NPO法人　唐津・玄海観光交流社
TEL：0955-82-2811

世界海洋プラスチックプランニングセンター（愛称 PLA PLA）　唐津市

● 海洋プラスチック問題を知る・体験する・行動する世界初のミュージアム。
● 海洋プラスチック再生体験を通じて自分にできることを考える教育プログラムを準備。
● ビーチクリーンやアップサイクルで体感的に学べます。

2026年6月7日 OPEN！

アクセス
福岡空港または博多駅から約1 時間40分（バス）
唐津市内から約30分（バス）
長崎市から約2時間10 分（バス）

問合せ先
佐賀県 県民環境部 脱炭素社会推進課
TEL：0952-25-7079

唯一無二！　大空のもと、どろんこになって環境学習

干潟体験　鹿島市

● 修学旅行だからこその体験で、一生の思い出に。
● 泥んこになっても安心の受入体制。
● 最大受入 300 名程度。雨天でも実施可能（むしろ盛り上がる?!）

アクセス
福岡空港または博多駅から約1時間40分（バス）
長崎市から約1時間15分（バス）
最寄り駅（肥前鹿島駅）から約12分（バス）

問合せ先
道の駅鹿島　干潟体験課
TEL：0954-60-5040

日本の近代化に貢献した幕末佐賀藩の取組から、先人たちの熱い想いを体感。

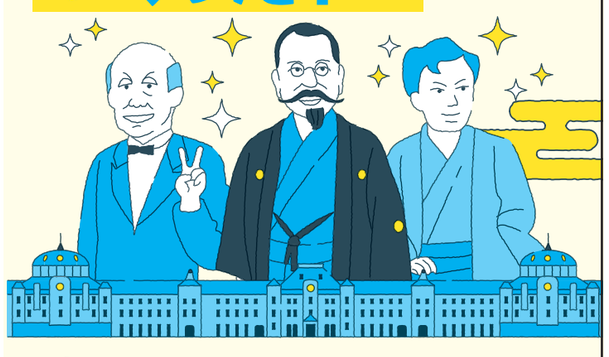
佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館　佐賀市

● 日本赤十字の父「佐野常民」や世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産「三重津海軍所跡」を学べる施設。
● 視覚的にインパクトのある動画で当時に想いを馳せ、施設展示や現地見学等で深い学びに。

アクセス
福岡空港または博多駅から約 1 時間 30 分（バス）
最寄り駅（佐賀駅）から約30分（バス）

問合せ先
佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館
TEL：0952-34-9455

そもそも
東京は佐賀人がつくった！



時は明治時代。首都を東京にしようと提言したのは江藤新平と大木喬任でした。司法制度や、三権分立に基づく国家制度を設計し、国民皆教育の道を開いたのも江藤新平。そして、日本初の鉄道を通し、早稲田大学を創ったのは大隈重信です。日本銀行本店や東京駅を設計した辰野金吾も、経済の中心・丸の内オフィス街の建築を主導した曾禰達蔵も、実はみんな佐賀人。近代日本の礎を担い、社会基盤や首都のグランドデザインを担ったのは佐賀人たちなんです。時を遡ると、弥生時代に邪馬台国を彷彿とさせる国内最大の集落が吉野ヶ里にありましたからね。※諸説あります

好きです！佐賀県　詳しくはこちら！

（一般社団法人）佐賀県観光連盟　TEL：0952-26-6754　URL：https://www.asobo-saga.jp/business/